木の葉のワンコ娘

冬山　楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
木の葉のワンコ娘

【Ｎコード】
Ｎ９６５５Ｚ

【作者名】
冬山　楽

【あらすじ】
犬塚家の次女が木の葉の里で頑張るお話し。
恋愛したりバトルしたりと大暴れ！！
シカマルに想いを寄せるブラコン姉さん、いざ参る！！

木の葉のワンコ娘（ストーリー、キャラ設定）

この小説は、原作沿い＋オリジナルの設定の夢小説です。

シカマル落ちです。
主人公以外の恋愛要素もあります。
最初はオリジナルから入り、原作は一部の中忍試験開始から始まります。

次は夢主&オリキャラ紹介です！！（話が進むとキャラの追加や設定の追加があります）

主人公

「犬塚ミミ」

犬塚家の次女でキバの一つ上の姉。
家族を大切にしている。
母や姉、忍犬達も好きだが、一番はキバ。
キバ大好きな超がつくほどのブラコン。
明るくて優しい性格。（ただし、弟が傷つけられたりするとかなり怖い）
小さい子に好かれやすい。
愛犬（忍犬）は、赤丸と同じサイズの柴犬、『茶々丸』。
ネジ達の同期。
実は下ネタが苦手。

シカマルのことが好き。
戦闘スタイルは基本的にキバと同じ。

「水鳥シミズ」

ミミと同じチーム。
毒舌ドSな性格。
初対面だろうが年上だろうが容赦ない。
カノンを虐める（弄る）のが好き。
冷たいように見えるが、実は結構仲間思い。
ミミとカノン、ヤイバは、かけがえのない存在。
意外にも甘い物が好き。
戦闘スタイルは、水遁と毒を使う。

「火堺カノン」

ミミと同じチーム。
ヤイバ班のツッコミ役で苦労人。
ミミのブラコンや、シミズの毒舌に振り回されたり、厄介事に巻き込まれたりなど、不憫体質。
ヒナタに想いを寄せている。
リーとは仲の良い友達で良きライバル。
戦闘スタイルは、火遁と体術を得意とする。

「ヤイバ」

ミミ達の担当上忍。
寝ることが好きで、どの時間帯でもどの場所でも基本的に寝れる。

普段は温厚で、怒ることも少ないのだが、睡眠を邪魔されるとブチギれる。
カカシの後輩。
戦闘スタイルは、刀を武器として戦う。
実力は今の所不明…。

先程あげたように、ストーリーが進むと、キャラが増えることがあるので、増えたら新しくキャラ設定を追加するのでよろしくお願いします！

それから、この小説は一応、一部で終わる予定です。
もし、二部の方も書いてという要望があった場合は、作ろうかと考えています。
ですが基本的には一部設定のまま終了する予定です。
では次からお話しに入っていきます！！

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」

火の国、木の葉隠れの里のとある家…

「お母さん！ハナ姉さん！」

バタバタと階段から降りてくる少女に二人はため息をつく。

「あんたの言いたいことは分かってるよ。アカデミーの卒業試験のことだろう？」

母のツメがそう言うと、少女はビシッ！と指をさす。

「そう！今日はアカデミーの卒業試験！！愛しのマイブラザーがついに下忍になる日だよ！！」

「まだ卒業するとは決まってないでしょう」

「そんなことないよ！！キバは絶対受かるわ！！！」

そう言うと少女はムカつくくらいのどや顔を披露する。

そんな少女に柴犬が足元にスリスリとすりよってきた。

「キバがもうすぐ私と同じ下忍…あーーっ楽しみ！！ねぇ、茶々丸！！」

「ワン！」

「ほら、いつまでもはしゃいでないでさっさと着替えてご飯食べなさい、ミミ」

「はーい！！」

先程から騒がしいこの少女…彼女の名は犬塚　ミミ。
犬塚家の次女で、立派な下忍だ。
彼女の側にいる柴犬の名は茶々丸。
彼女の愛犬だ。
なぜ彼女がこんな朝っぱらから騒がしいのか…その原因は弟のキバがアカデミーの卒業試験を受ける日だからだ。

―忍者アカデミー前

「キーーーーバーーーー！！！」

卒業生とその家族が集まる中、ミミは愛しの弟を見つけると素晴らしいスピードで弟に近づき、思いっきり抱き締める」

「うわっ！ミミ姉ちゃん！！」

「卒業おめでとー！！キバはやっぱりお姉ちゃんの自慢の弟だよ！！」

キバの額につけられた木の葉のマークがついた額宛を見て嬉しそうに言う。

「あったりまえだ！！俺もこれから姉ちゃんと同じ下忍だぜ！」

ミミに褒められ、ニカリと笑いながらキバは言う。

（あああぁ！！可愛いキバ、ホントに可愛い…！！）

そんなキバにミミは内心暴走気味だった。（オィ

ピクリ…

「……」

「姉ちゃん…？」

「キバ、後でお姉ちゃんと茶々丸達の散歩しようか」

「よっしゃーー！！」

「あっちにお母さんとハナ姉さんがいるから行って卒業したって報告してきなさい」

「おぅ！」

そう言ってキバはミミが指さした方向へ走って行った。

「…さてと」

キバを見送ったミミはある人物の場所へ走って行く。

「アカデミー合格おめでとう、シカマル」

「…あぁ」

父のシカクに言われ、少しきだるそうに返事するシカマル。
すると…

「シカマルーー！！」

「うぉっ？！」

シカマルの背中にタックルしてきたのは先程キバと一緒にいたミミだ。

「シカマルもアカデミー卒業したんだね！おめでとー！！」

「み…ミミ?！」

自分にタックルしてきた人物を見て驚くシカマル。

「やぁ、ミミちゃん。相変わらず元気だね」

「シカマルのお父さん！こんにちは！！」

「…何しにきた…って、どうせキバのことだろ…」

「もちろん！！」

胸を張って何故か威張るように言うミミにシカマルはため息をつく。

「もー何ため息ついてんの！！幸せが逃げちゃうよ？」

「頭撫でんな」

ため息をつくシカマルの頭を撫でるとシカマルにその手を振り払われる。

そのやり取りを、シカクはニヤニヤしながら見ていた。

「ふふっ、私これからキバと茶々丸達の散歩に行く約束してるから！じゃあねシカマル！！」

そう言うと、ミミはその場を素早く去って行った。

去り際に『今行くよマイブラザー！！』っと、叫んでいたミミにシカマルはまたため息をつく。

「嵐のように突然来たと思ったら嵐のように去って行ったな…たくっ、相変わらずめんどくせー奴だな…」

（キバもシカマルも無事アカデミーを合格…けど、まだ本当の意味で合格したわけじゃないからね…）

茶々丸を優しく撫でながらミミは目を細めた。

「まぁ、キバとシカマルなら大丈夫だろうけどね！さーて、キバと赤丸と散歩に行こうか、茶々丸！」

「ワンワン！！」

そう言ってミミは元気よく飛び出して行った…。

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」（後書き）

はい！！第1話目からグダグダです！！
こんな感じの連載をしていくので、こんなんで良かったらお付き合いください！！

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」

―犬塚家

「キバ、今日は一緒に任務をするためのスリーマンセルの班決めらしいね」

母と姉が朝早くから任務に行っていて、家にいるのはミミとキバと愛犬を含めた忍犬達。
忍犬達と朝食をとりながら、ミミはキバにそう言う。

「そうだぜ！誰とチーム組むか楽しみだな！！」

「キバはこの人と組みたいとかあるの？」

「あ～…基本誰でも良いけど、ナルトとだけは組みたくねえな」

「なんで？」

「アカデミー生の中で一番のドベだから。絶対足引っ張られる」

「ふーん…」

キバの答えに相槌をうちながら朝食を食べる。

「ミミ姉ちゃん、行って来まーす！！」

「行ってらっしゃい、気をつけてねー！」

朝食を食べ終わったキバは、ミミに見送られながら元気よく飛び出して行った。

「さて、家の掃除したらいつもの演習場に行くか」

そう囁くと、ミミは腕を捲り、家の掃除を開始した。

「！！…きたか…」

「おせーぞミミー！！」

「ごめ～ん！！」

掃除を終え、演習場に行くと二人の男がミミに向かって手をふっている。

「あれ？ヤイバ先生は？」

「多分、またどっかで昼寝してると思う」

「先生が言ったことなのに？！」

「いつものことだ、先に俺ら三人で演習するか」

「そうね…いくわよ！！シミズ！カノンも」

「「おぅ！」」

ミミの言葉を引き金に三人は戦いの体制に入る。

さて、今ミミと一緒に修行している二人の男…。
彼らはミミとスリーマンセルを組んでいるチームメイトだ。
水色の髪をした少年の名は水鳥シミズ、オレンジ色の髪をした少年の名は火堺カノンと言う。
どちらもミミが心から信頼できる人物だ。
修行も中盤にさしかかったその時…。

「すまねぇなお前ら、寝坊した」

演習場に突然煙がまう。
煙の中から出てきたのは、深緑色の髪をした青年だ。

「「「先生！！」」」

そう。この青年　こそミミ達の担当上忍、釧ヤイバだ。

「もう！昼寝も良いけど修行しようって言ったのは先生の方なんだから！！時間守ってよ！！」

「悪かったって」

「まぁ先生も来たことだし、修行再開しようぜ」

「よし、手加減せずかかってこい」

ヤイバがそう言うと、再び戦闘体制に入る。
彼らの実力はなかなかのものだが、その強さは今はまだ語らず、近々明かしていこうと思う…。
こうして彼らの修行は夕方まで続いた…。

（キバ、仲間ってとても大事だよ。誰と組んでもキバにとってかけがえのない仲間になるはずだよ…今の私達みたいに…）

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」（後書き）

1話目よりもグダグダ！！
原作に入るまでは、こんな感じのオリジナルです。
なんとか頑張って書いていきます。

第3話「お姉ちゃんの同期生」

「おまえら、今日はガイさんとこの班と合同演習だ。俺は別のようがあるからおまえらだけで演習場に行ってくれ」

朝の8時。
担当上忍のヤイバがミミ達にそう告げると、すぐさま火影邸に向かった。

「あの暑苦しい奴の所に行くのかよ、ふざけんな死ね」

「シミズ…（汗」

ブツブツ文句（というか毒舌）を言うシミズをカノンは冷や汗を流しながら見る。

「う～ん、確かにガイ先生は暑苦しいけど、久しぶりにテンテン達に会えるから私は良いと思うよ。ここ最近、ガイさんの班とは任務とかですれ違いになったりしてなかなか会えなかったから」

そんな雑談をしながら三人は演習場へ向かった。

「はっはっはっ！！せーしゅんしてるかーーー！！！！」

三人が演習場に着いたその直後、目の前にガイが現れ親指をグッとたて、まっしろな歯をキラリと見せ、そう言い放つ。
いきなり現れたガイに三人は思わず一瞬固まった。

（あ、相変わらず濃い…（汗）

（良い人ではあるんだけど…（苦笑）

（まじうぜー…喋れなくしてやろうか）

ガイに対してそんなことを思いながら演習場の中心を見ると、ミミ達の同期生がすでに演習を行っていた。

「テンテン！！ネジとリーも！！久しぶり！！」

ミミが元気よく三人に向かって手を降る。

「きたか…」

「！　ミミ！！」

「シミズくんとカノンもお久しぶりです！！」

ネジ、テンテン、リーの三人はミミ達の姿を確認すると一旦演習を止め、自分達に近づく三人を暖かく出迎えた。

「ミミ、シミズ、カノン！！ヤイバから話は聞いている。今日は我が教え子達と存分に演習に励んでくれ！！！」

「「「はい！！！」」」

三人はネジ達と向かい合い、お辞儀をすると、すぐさま彼らから距離をとり、戦闘体制に入る。

ネジ達も同様に戦闘体制に入る。

テンテンがクナイを投げ、ミミもクナイを投げ、二つのクナイがぶつかり弾き飛ばされた瞬間、全員一斉に動きだした…。

「ハァ…さすがテンテン。武器の扱いが上手。油断したら串刺しになっちゃうかも…」

「ミミこそ腕をあげたわね。また一層スピードが上がったわ」

ミミはテンテンから繰り出される数々の忍具をかわし、自慢のスピードでテンテンに攻撃を仕掛けるが、トンファーで受け止められる。

「くっ…！！相変わらず良いスピードだなリー。これで重り付なんだよな…っ」

「カノンこそ、素晴らしい体術です！！君もまたたくさん努力して修行していることが拳から伝わってきます！！青春です！！」

カノンとリーは体術のぶつけ合い。
攻撃しては避けられ、攻撃しては受け止められることの繰り返し。
どちらも良い勝負をしている。

「さすがは日向…と言ったところか。接近を許せば点結を突かれる…敵に回したくねぇな」

「そのわりにはあまり焦っていないな。攻撃しようとしてもうまく距離をあけられる…」

ネジからなるべく距離をとり、遠距離で攻撃するシミズ。
その攻撃を軽くかわし、接近戦に持ち込む機会を伺う。
それぞれの戦いは決着がつかぬまま夕方になった。

「ガイ班の皆、今日は演習に付き合ってくれてありがとう！！」

演習を終え、泥だらけになった姿で綺麗に笑い、そう言うミミ。

「おう！みんな実に青春していた！！ミミ、シミズ、カノン！！またいつでも我が教え子達の相手になってくれ！！！」

ガイはいつものポーズをとり、そう言い放つ。

そんなガイの姿にミミ達は再び苦笑い（約一名は冷たい眼差しで）

「あっ、そう言えばもうすぐ中忍試験が始まるみたいね」

テンテンの言葉にミミ達はあぁ…と頷く。

「もうそんな時期か」

「確か今回は参加するんだよね？私達。もちろんテンテン達もだよね？」

「ええ、そうよ 」

（キバやシカマル達はまだルーキーだし、経験を積んでから参加するんだろうな～…一緒に参加したかったなぁ…）

ミミはこっそりため息をついた。

今年はルーキー達全員が中忍試験に参加することを知るのはもう少し先の話である…。

おまけ

―昼休憩時

ミミ「でさぁ、愛しの弟が額宛を見せて満面の笑みを浮かべた時は凄かった！！天使！キバは私の天使だよ！！」

テンテン「また始まった…」

リー「ミミさんと手合わせしたりするのは好きなんですけど…」

ネジ「休憩に入る度に弟の話ばかりしてくるのは鬱陶しいな…」

カノン「俺とシミズはもう聞き慣れちまったよ…」

シミズ「病気だな病気。ずっと病院で隔離されれば良いと思うぞ…」

ミミ以外『ハァ……』

終われ

第3話「お姉ちゃんの同期生」（後書き）

戦闘シーンを書くのは難しいですね（汗
てかオマケのお姉ちゃん暴走しすぎた感が否めません…。
もうちょっと落ち着かせた方が良かったかも知れません…。
次はシカマルと絡ませたいと思っています！！

第４話「お姉ちゃんとシカマル」

―森の中

「キバ、チームメイトとは仲良くしてる？」

「おう！良いチームだと思うぜ！！な？赤丸！！」

「わん！」

キバが正式な下忍になり、同じ班の人達と任務を行い初めてから３日目になった。
キバのチームメイトは日向ヒナタと油女シノ。
担当上忍は夕日　紅と言う女性の上忍らしい。

「しかし、キバのチームはなんか感知タイプの子ばっかだね。まさに探索のスペシャリストってところかな？」

「そうかもな」

ミミとキバは森の中を激しく散歩しながら喋る。

（確か卒業生の中から選ばれるルーキーは3チームまでだったよね…その内の1チームがキバ達の班だから…あと2チームはどこなんだろう…）

「飛ばすぜ赤丸ー！！」

「わんわん！！」

スピードをあげたキバと赤丸に、ミミと茶々丸もスピードをあげる。

（シカマルのチームは確実に入ってるはず…となると、残りの1チームが気になるな…）

キバ達と散歩をしながらミミはそんなことを考えていた…。

「え～っと、今晩のメニューの材料は…」

キバ達と朝の散歩を終え、商店街で今日の晩御飯の材料を買いに来ていた。

その時、ミミの知っている匂いがした。

その匂いを辿っていくと…。

「…シカマル？やっぱりシカマルだ！！」

「あ？…ミミじゃねぇか」

自分に近づいてきたミミに気づいたシカマルはふあぁっ…と欠伸をしながらミミを見る。

「こんな所で何してるの？」

「母ちゃんに頼まれて買い物。めんどくせーけど、ちゃんとやらねぇと怖いからな、うちの母ちゃん…」

「ははは！そっか。そういえばさ！！シカマルは合格したの？アカデミーに送り返されてない？」

「あぁ…一応合格した」

「だよねー！！シカマルなら合格すると思ってたんだー！！」

「ハァ？なんでそう思ったんだよ？しかもそんな自信満々に…」

「あなたはめんどくさがったりしなければできる男だから！！それに合格しなかったから困るし」

「なんでお前が困るんだよ」

「え？！それは…えっと…」

「？どうした？」

「なんでって…合同任務とかで一緒になれるかも知れないし…それに…その…」

だんだん言葉が小さくなるミミにシカマルは首を傾げる。

「～っと、とにかく！！／／／下忍になったからには少しはめんどくさがらず頑張りなよ！！」

「あ～はいはい…」

「はい、は一回！！」

「めんどくせーな…」

ミミは少し頬を赤らめながら、シカマルとそんなくだらないやり取りをしていた。

（うぅ～／／／普段は普通に抱きついたりしてるくせに…私のバカ！！！）

ミミの心の中の葛藤を、シカマルは知る余地もない…。

第４話「お姉ちゃんとシカマル」（後書き）

スキンシップはするのに、言葉にするのは恥ずかしい変人なお姉ちゃん。

原作突入まで後少し…！

第5話「砂忍との出合い」

「もうすぐ中忍試験始まるね～」

「昨年は力をつけるために参加しなかったからな。頑張って合格してやる！！」

「まったく、普段の任務の功績で中忍を決めれば良いもの…わざわざ試験で決めるなんてまじウゼェ…中忍試験考えた奴地獄に落ちれば良いのに…」

「「……（汗」」

シミズの毒舌を聞いて苦笑いしかできないミミとカノン。

「ま、まぁそう言わずにがんばろうぜ！」

「そうそう……！！」

「？　どうしたミミ」

周りをキョロキョロと見回すミミに気づいたカノンが声をかける。

「…この里に違う里の人間がいるわ…」

「おそらく中忍試験を受けにきた忍だな」

鋭い嗅覚で察知したミミに対してシミズはそう答える。
その時、ミミの近くにいた茶々丸が走り出す。

「え？茶々丸？！」

「違う里の忍の所に向かってるなあれは…どうする？」

「もちろん追いかけるわ。それに、どんな奴らかちょっと気になるし」

「それもそうだな」

三人は走り出した茶々丸を追いかけることにした。

「茶々丸？」

茶々丸が止まったのを確認したミミ達は、ゆっくりと歩きだし、茶々丸が見ている方を見ると、六人の忍と子どもがいた。
六人の内三人は同じ木の葉の額宛をつけており、残りの三人は違う里の額宛をつけていた。

「あの額宛って…」

「木の葉の同盟国、風の国の砂隠れの忍だな…」

ミミとシミズが小声で話していると、カノンが二人の肩をトントンと叩く。

「あそこにいる黒髪の奴…あいつ、今年のＮｏ．１ルーキーのうちは一族の奴じゃねぇか？」

その言葉に二人はカノンの指さした人物を見ると、背中の服にうちわの模様が描かれている。

「確かに…間違いないな」

（へぇ～、最後の一班があのうちは一族の忍が率いる班だったなんてね～。これは手強い相手ね、キバ、シカマル…）

気配を消しながらそう話していると…

「クゥン…」

「！！…茶々丸…？」

茶々丸がミミの足元に怯えながらすりよってきた。

「…シミズ、カノン。茶々丸があのひょうたんを背負った忍に怯えているわ…あいつ…相当強いわよ…」

茶々丸の頭を優しく撫でながら二人にそう言う。

「だろうな…」

「！　おい、砂の奴らがこっちに来るぞ」

「挨拶くらいした方が良いかな？」

「のんきだなミミ…」

「俺は構わないぞ。奴らの心をズタズタにするような挨拶を披露する気満々だからな…（ニヤリ」

「頼むから問題だけは起こさないでくれ…相手が同盟国ならなおさら…」

そうこうしている間に砂の忍達は三人の姿をとらえた。

「あっ、気づかれた…えっと…こんにちわ？」

「（なんで疑問系なんだ…）お前ら中忍試験を受けに来たんだろ？木の葉の里は良い所だからゆっくりしていってくれ」

「……」

スッ……

「が、我愛羅…」

我愛羅と呼ばれた瓢箪を背負った少年は三人には目もくれず、その場を去ろうとする…。

―ガッ

「こいつらがわざわざ挨拶してるのに、何も言わずに立ち去るとは…どういう教育してんだよ」

（おいいいぃぃ！！！）

「……気安く触るな…殺すぞ…！！」

ゾクッ…

「…っ」

「（この殺気…ヤバい！！）俺のチームメイトが失礼なことをした！！ほら、シミズ「気にくわなかったら殺気で脅して黙らせようとかバカなのか？なんでも自分の思い通りになるとでも？いっぺん病院に逝ってきたらどうだ？頭の方の」

「何やってんだシミズーー！！！火に油注ぐどころか起爆札投げ込みやがった！！てか，いく，の漢字違うから！！！！」

シミズの毒舌に我愛羅はしばし彼のことを睨み付ける。

我愛羅と一緒にいる二人は青ざめた顔で我愛羅を見る。

まさに一触即発の雰囲気になっていた…。

しかし…

「…ククク…おもしろい…お前…名は？」

我愛羅は殺気を出すのをやめた。

「俺の名前を聞く前にお前から名乗りやがれ狸野郎」

「…我愛羅…砂漠の我愛羅だ…」

「我愛羅…俺の名は水鳥シミズだ」

「水鳥シミズ…覚えておこう…ククク…うちはサスケに水鳥シミズ…中忍試験が楽しみだな…」

そう言うと我愛羅は三人を通り抜け、先に進む。
我愛羅と一緒にいた二人はしばらく呆然としていたが、我にかえると我愛羅を追いかけようとするが…

「ちょっと待って！！もし良ければ…あなた達の名前も聞かせてください…！！」

我愛羅の元へ行こうとしていた二人に、ミミは名前を尋ねる。
二人はミミの言葉にキョトンとした顔つきになる。

「あ、あぁ…私の名はテマリだ」

「俺はカンクロウ。まぁよろしくじゃん…」

「私は犬塚ミミ！！よろしくねテマリさん、カンクロウさん！！」

ミミは笑顔で答えた。

「はぁ～。シミズがあんなことするからどうなるかと思ったぜ…」

「中忍試験に行けばまた会えるんだよね！楽しみだなぁ」

「厄介だな…さっき罵声を浴びせるだけじゃなくてそのまま潰しとけば良かったな…」

「んなことしたら同盟が破棄されちまうだろ！！」

「大丈夫だカノン。今のは冗談だ…半分な」

「残りの半分は本気かよ！！？」

「試験会場に行ったらキバの話をいっぱい話さなきゃ！」

「お前はそればっかりだな?!」

好きがってなことばかり言うミミとシミズにカノンは胃の辺りを押さえた。

こんな三人組が中忍試験でどう活躍するのか…それはまだ誰にも分からない…。

第5話「砂忍との出合い」（後書き）

砂忍と絡みましたね。
微妙に原作沿いですね。
そしてシミズの口の悪さが半端ない…！！！
我愛羅にとんでもないことを言うシミズはなんて怖いもの知らず…。
次回はとうとう原作に突入！！

第6話「中忍試験開幕」

「お前ら、今年で初めての中忍試験だ。心の準備はできてるな？」

中忍試験当日。
ヤイバは今年初出場となる教え子三人に向かってそう言う。

「バッチリですよ先生！！」

「問題ない」

「むしろワクワクしてるくらいだぜ！！」

やる気は充分な三人に、ヤイバは頷く。

「とりあえず、試験会場に行く前に、俺からお前らに言うことはただ一つ…」

三人を見つめる目付きが真剣になる。

「後悔の残る戦いは絶対するな。勝っても負けても、自分が後悔するような戦いはするな…中忍試験…悔いが残らないよう頑張ってこい！！！」

「「「はい！！」」」

ヤイバの言葉に三人は真剣な顔つきで返事をした。

―中忍試験会場

ザワザワ…

「わぁー人多いね～」

「なぁ、カノン」

「？　どうしたシミズ」

「このウザくて暑苦しい人ゴミ、クナイで刺しまくって良いか？」

「ダメに決まってんだろ！！あと『人ゴミ』じゃなくて『人混み』！！字が違う！！！」

いつものシミズの毒舌にカノンがツッコミをいれる。
ミミはそんな二人のやりとりにクスクス笑う。
その時…
ガツンッ！
っと、誰かが殴られた音が聞こえる。
「何？！」
「おい、あれってリー達じゃないか？」
カノンが指をさした方を見ると、扉の前に知らない男達が立っていて、リーが頬をおさえていた。
「リーの奴、わざと殴られたな」
「あぁ。リーのスピードなら普通に避けれるからな」
「……」
相変わらず扉の前から退いてくれない男達に次はテンテンが説得しにいく。
「お願いですから…そこを通して下さい」
丁寧な口調で男達にお願いするが、一人の男がそんなテンテンを殴ろうとする…が。

パシッ…

「女の子を殴ろうとするなんて最低ですよ」

男の拳をミミが受け止めていた。

「ミミ…」

「やっほー、テンテン」

「このアマ…！！」

「茶々丸、女の子に手をあげる男なんて噛みついちゃえ！！」

「わんわん！！」　ガブッ！

「いてぇ！！」

茶々丸がテンテンを殴ろうとした男の腕に噛みつく。

男が振り払う前に腕から離れ、嫌そうな顔つきをすると、ペッペッ…と唾を出す。

「あら、不味かったのね？可哀想に…」

ミミは茶々丸に口直しのビーフジャーキーを食べさせる。

そんな様子を見て男は怒りで顔を赤くする。

「おいミミ。くだらねーことしてねえでさっさと三階にいくぞ」

「おいおい、何のことだ？三階はここだぞ？」

「いや、その男の言うとおりだ…」

「！！」

シミズの言葉に、後ろから同意する声が聞こえた。
後ろを振り向くと、そこにいたのは…うちはサスケだ…。

「サクラ、どうだ？お前なら気づいているはずだ…」

「え…？」

サスケがピンク色の髪をした少女、サクラにそう言う。

「お前の分析力と幻術のノウハウは……オレ達の班で一番伸びているからな」

「…もちろんとっくに気付いてるわよ。だってここは2階じゃない」

サクラがそう言うと、幻術が解けた…。

「ふ～ん…なかなかやるねぇ。でも…見破っただけじゃあ…ズズッ、ねぇっ！！」

バッ！

扉を通せんぼしていた男が攻撃を仕掛けてくる…だが…。

ザッ
バシ、バシ！

「！！」

その攻撃はリーによって止められた。

「ナイス、リー！！」

「けどあいつ、さっきまで何もしなかったよな？どうして急に…」

リーの行動に疑問をもつカノン。

「フー」

「おい、お前約束が違うじゃないか。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのはお前だぞ」

「だって…」

リーはそう言うとある人物に目を向ける。

その人物とは…

サクラだ。

「…リー、あのサクラって子見てるね」

「しかもなんか頬少し赤いな…」

「あのー」

「！」

ミミ達がそう話している間にも、リーはサクラに近づく。

「僕の名前はロック・リー。サクラさんというんですね…ボクとお付き合いしましょう！！死ぬまでアナタを守りますから！！」

そんなことを言い出したリーに、ネジ、テンテン、シミズは呆れた様子で。ミミとカノンは呆然とした様子でリーを見た。

「ぜったい…イヤ…あんた濃ゆい…」

即効でフラれた。

（うわぁ…）

（まぁ、当然の結果か…）

（頑張れ、リー…）

ミミ達は哀れみのこもった目でリーを見た。

「おい、お前…」

ネジがサスケに向かって言う。

「名乗れ」

「人に名を聞く時は、自分から名乗るもんだぜ…」

そんな二人のやりとりに気づいたミミが『あらら…』と思わず声をもらす。

「ネジの奴、早速うちはサスケに目をつけたな」

シミズも二人のやりとりを見てそう答える。

「うちは一族は木の葉の優秀な戦闘部族だからな…」

その時…。

「目つきの悪い君。ちょっと待ってくれ！」

「！」

「げっ！！」

「何だ？」

リーはサスケを見て口を開く。

「今ここで、僕と勝負しませんか」

リーの目は本気だった…。

中忍試験…いきなり嵐の予感だ…。

第6話「中忍試験開幕」（後書き）

原作に突入しました！
ヤイバ先生の台詞が少しありがちかも知れません…。
次回、サスケとリーが対決！！
そしてミミ達がそれを傍観します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9655z/

木の葉のワンコ娘

2011年12月31日18時51分発行